

- ・ 平成 22 年 8 月 21 日(日)
- ・ 東京家政大学 板橋キャンパス

財団法人 全日本私立幼稚園幼児教育機構  
第 1 回 幼児教育実践学会 口頭発表

## 保育者の言葉と意識

(学)黒木学園 徳力団地幼稚園  
高原 恵子

### 1. はじめに

「愛語よく廻天の力あり」(正法眼蔵)とは、愛のこもった言葉は人を喜ばすだけではなく、天をも動かす力があるという道元の言葉である。また、新約聖書のヨハネによる福音書では「はじめに言葉があった。すべてのものはこれによってできた。できたもののうち1つとしてこれによらないものはなかった。この言葉にいのちがあった」と、人間は言葉で考える存在であることを冒頭に記している。

言葉は思考の道具である。言葉は私の人生を形づくる道具である。

保育もまた言葉で成り立っている。言葉で保育しているといっても決して過言ではないだろう。

そして今、私たちは言葉が溢れる情報化時代に生きている。それを受けて、子どもを取り巻く社会も多種多様な問題を抱えている。しかしながら、どんなに時代が変わろうとも、保育者がめざすものは「子どもの幸せ」に変わりはない。そこで、よりよき保育実践のために、保育に携わる保育者の言葉を見つめ直すことによって、現代の保育者が抱える喜び・悩みといった意識を探ることはできないものだろうか。

### 2. 問題設定と研究目的

#### (1) 保育者の豊かな言語の獲得のために

今から 5 年ほど前のこと、ほのちゃんという 5 歳児のエピソードである。ほのちゃんには、なかよし 3 人組の友達があった。しかし、3 人という友達関係は、時折難しい問題を含んでいる。小さなトラブルが起きると、自己主張の少ない穏やかな心根のほのちゃんは、寂しい思いをしているのではと思われる場面がしばしばみられた。

年長組 2 学期のことである。足に障害があり歩行のために補助器具を付けた女兒が転入してきた。トイレなど若干の補助が必要だった。そこで、転入児紹介の会の時、私の横に座っていたほのちゃんに「ほのちゃん、よろしくね」と声をかけた。すると彼女はにこっと笑って「先生だいじょうぶよ、ともだちだもん」と答えた。

保育の中で「ともだち」は最も多く使われる言葉のひとつであるが、今紹介してもらったその女兒を「ともだち」と認識した彼女の言葉に少し違和感を感じ、重ねて質問した。「ほのちゃん、ともだちってなんなん？」・・・すると、ほのちゃんは少し不思議そうに、そして実にあっけらかんと「先生知らんの、ともだちってね、けんかしても仲よくすることよ」と即答したのである。

私は思わず息をのんだ。3 人組の人間関係の中で培われたほのちゃんの育ちを垣間見たような静かな感動を感じるとともに、さて、私達保育者が「ともだち」について問われたとして、これほど明確

に適格に即答する言葉を持っているだろうかという疑問を持った出来事であった。

また、ちょうどその頃私は「道徳性の芽生えを培う」というテーマで発表する機会があり、思考錯誤していた。「そもそも子どもは心というものをどう認識しているのだろうか」という実に初歩のところで行き詰っていた。

カトリック系の幼稚園だったので、月に一度神父様の話を聴く会が子ども達のために開かれていた。たまたま、その月の主題は「神様は自分が汚れながら、みんなの心をきれいにする雑巾みたいなものですよ」という話であった。翌日、通園バスの添乗をしていた私の横に、しんちゃんという5歳の男児が座り、私にこういう話をした。「先生、僕、きのうけんかしたんよ。だから僕、雑巾を飲み込んだといけんのよ」というのである。その言葉を聞いて「子どもは心というものが自分の体の中に存在している」という認識を持っているのだと確信し、研究のスタートラインが見えた気がした。それと同時に、心をきれいにするということ、**「飲み込む」**という表現をした子どもの言葉に驚いた。これほど個性的に表現する子どもの前に立っている私が、これにに対応できる私の言葉を持ち得ているだろうか、とてもこころもとなく感じた出来事であった。

言葉の氾濫する情報化時代である。その手段であるインターネット・携帯電話等の普及はその利便性から、もはや私達の生活から切り離して考えられないものである。しかし、例えば携帯電話でメールを打ちながら時々思うことがある。時間・空間を超えて相手と繋がる便利なメールではあるが、その時使う言葉が、単なる伝達のためだけの記号になっていないだろうか。幾分懐古的な情緒ではあるが、まだ若い頃、言葉を選んで手紙を書き、投函し、その返事を何日も待ったあの時間は、実は精神の豊穡の時であり、深い思考の訓練の時間であったと確実に思う。利便性とスピードが優先する時代に生きる若者たちは、いつ、どこであの静かな思索の時を経験しているのだろうか。

私立幼稚園は、若い保育者によって日々の保育が支えられている部分が多い。社会全体の活字離れが話題になって久しい。言葉が思考する道具として、またコミュニケーションの道具として機能しているかを明らかにしてみたい。

## **(2) 保育用語の理解及び他者の保育者との共通理解を深めるために**

平成20年度の「幼稚園教育要領」の改訂を受けて、いくつか新たな課題が保育者に課せられた。進学先の小学校への「幼稚園幼児指導要録」の提出義務化もそのひとつである。過去、殆どの幼稚園が任意であったとしても、卒園する子どものすこやかな成長を願う心を込めて「幼稚園幼児指導要録」を作成し、届けていたと思うが、それが義務化となり、いよいよ保育者の書く力(=思考する力)が求められているということだ。

言葉の獲得は訓練である。言葉を使うという能力は、先天的に人間に組み込まれているが、言葉を獲得するという能力は、学習という後天的な環境によるものである。

私たち保育者の言葉も例外ではない。保育の中で使う保育用語は、養成校で教えられる。やがて就職し子どもの前に立った時、「ああこういうことだったのか」と実際の体験の積み重ねの中で獲得していくことが多い。例えば、「場で保育する」という言葉を例にとってみよう。悪戯をした子どもに注意を与えている時、その子どもの悪戯した理由に思わず納得し、共感した保育者の表情が緩むと、子どもがふっと穏やかな表情になったりする。そんな時「場で保育するってこういうことか」とこの言葉を理解する。私たちは日々、保育用語の理解という言葉の訓練をしているわけである。

更に、個々の保育者がそれぞれに保育用語の理解をしていくことの大切さはもちろんであるが、ともに保育をすすめている同僚の間で、保育用語の意味や意義が正しく共通理解される必要を感じている。例えば、最近話題になる「ちょっと気になる子」への対応にしても、チーム保育等で解決を図る手立てを取り入れることが多い。その場合でも、まず、その方法の中で使う保育用語の共通理解がなされていないと、子ども理解が深まらない。いくら議論してもなかなか解決に到らない。

同じことが研修の場でもいえるだろう。例えば、ある研修会に参加して、「今日の研修会はさっぱりわからなかった」と自分の勉強不足を反省することがたまにある。そこで「何故理解できなかったのだろう」と考えると、保育用語の理解に違いがあったのだと気付くことがある。どちらが正しい、正しくないという視点ではなく、単純に「用語の解釈が違う」「同じ土俵で話していない」ということなのだが、研修の深まりという点からみると、もったいなかったなあと思うことがある。

つまり、研修を深める思考の道具である保育用語の共通理解がなされないと、身に付いた研修にならないばかりか、堂々巡りで議論の深まりがなされないということである。

そこで、保育者が日常的に使っている保育用語の理解の実態、また他者の保育者との共通理解の実態を調査することによって、現代の保育者が抱える問題点を明らかにしてみたい。

### 3. 方 法

#### ① アンケート調査法

平成21年11月29日に大分県別府大学に於いて、第3回九州保育研究会が開催された。その発表のため実施した「保育者の言葉と意識」のアンケート調査を考察する。（アンケート用紙は参考資料として巻末に添付）

- 実施期間                      平成21年10月10日～10月30日
- 配布・回収の方法          郵送法
- 対象者                         福岡県北九州市内 私立幼稚園に勤務する教諭
- 調査数                         配布// 18園 125人 ◆ 回答// 18園 118人 （回収率94%）

#### ② 事例研究法

発表者が勤務する徳力団地幼稚園において展開された実践を記録し、考察する。

##### ● 本園の概要

本園は昭和45年に初代園長黒木道子によって創立された。黒木道子は、永年にわたり北九州市市立幼稚園に勤務し、退職後「子どもの幸せを確保する」という強い意志のもと「遊びの中で培う子どもの健やかな成長」を願い続けて実践を重ねた。その建学の精神は、今でも脈々と保育者の中に流れている。

銀杏並木の美しい緑豊かな自然に囲まれた団地の中央に位置し、都会の喧噪から隔たった静けさの中で保育が推進されている。

しかしながら、少子化・団地自体の高齢化で、年々園児減少を余儀なくされているが、「遊びを中心に据えた子どもの幸せ」を追求する教育目標に賛同する地域の方々に温かく迎え入れられている。

##### ● 本園の教育目標

知・徳・体の調和のとれた心豊かでたくましい幼児の育成

● 本園のクラス編成（平成 22 年 7 月現在）

	クラス名	園児数	担任
年長組	さくら組	17	1
	もも組	17	1
年中組	きく組	22	1
	ゆり組	22	1
年少組	もみじ組	15	1
	れんげ組	15	1

● 子育て支援活動

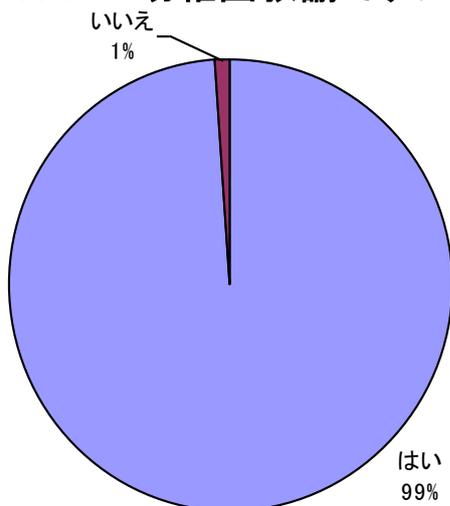
未就園児クラス、預かり保育を実施。また、平成 21 年度より空き保育室を利用して 1 歳から 3 歳までの保育を実施(北九州市子ども家庭局に届出済)。

#### 4. 研究の結果と考察

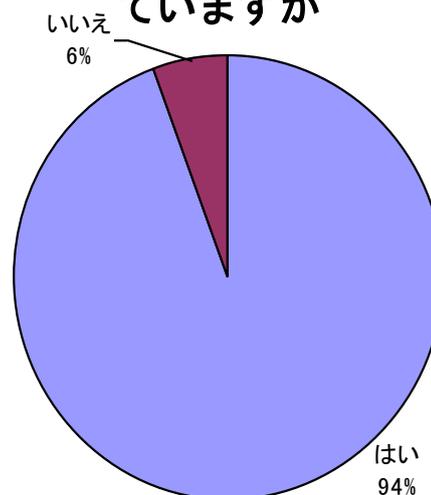
① アンケート調査から

①-1 アンケート調査の結果

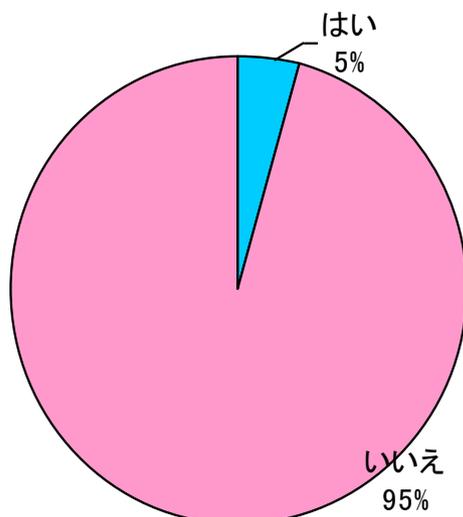
NO1 幼稚園教諭ですか



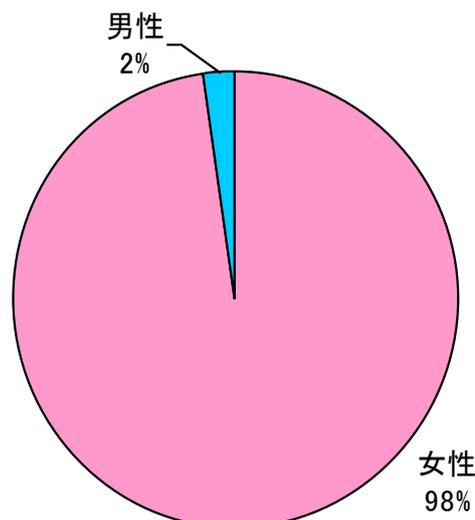
NO2 保育士資格を持っていますか



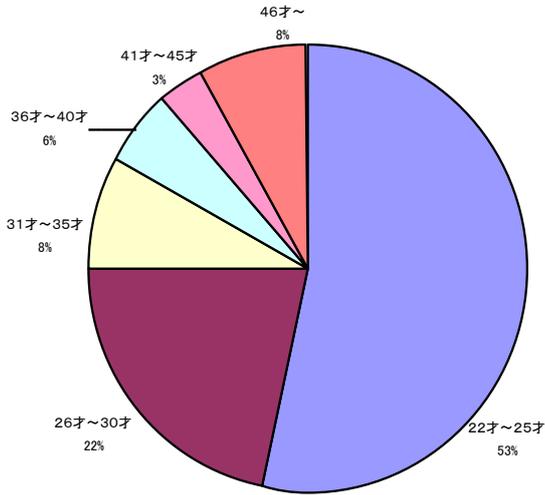
NO3 小学校教諭の免許をもっていますか



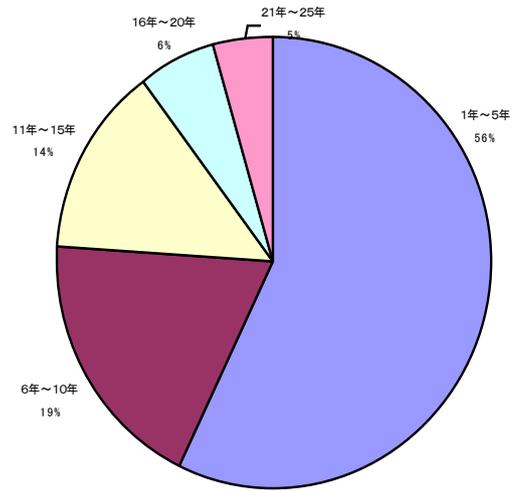
NO4 性別



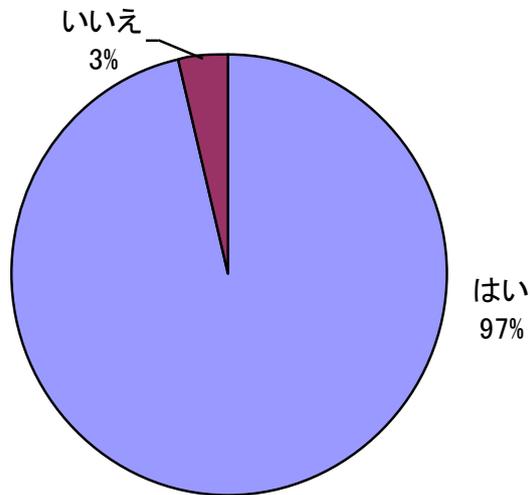
### NO5 年齢



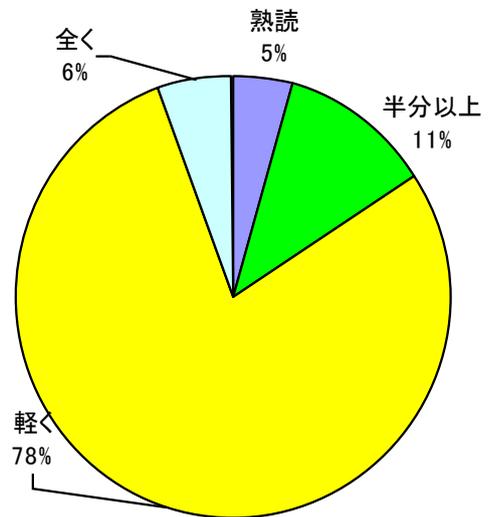
### NO6 経験年数



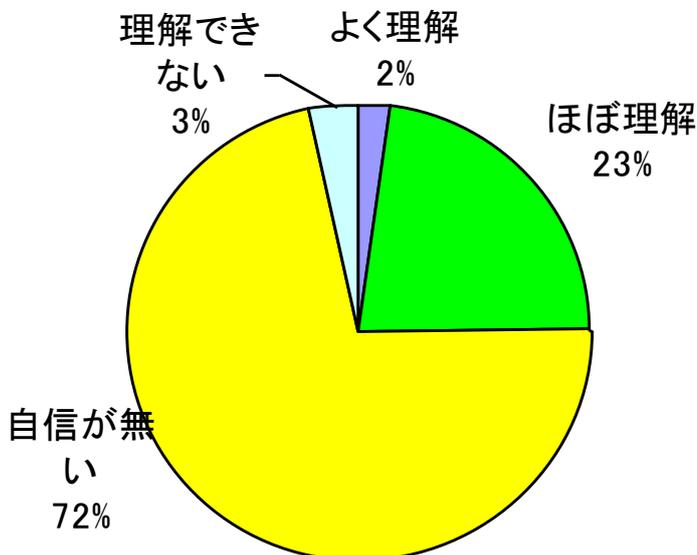
### NO7 教育要領改定を知っていますか



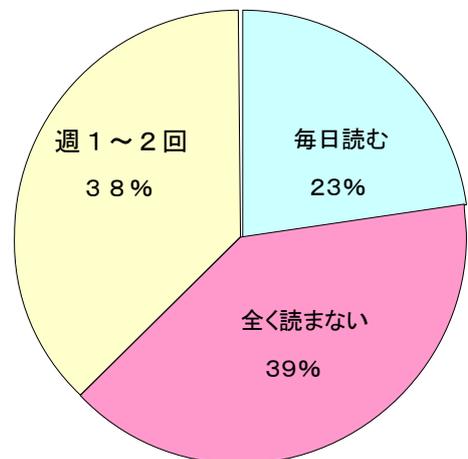
### NO8 新教育要領を読みましたか



### NO9 新教育要領を理解していますか



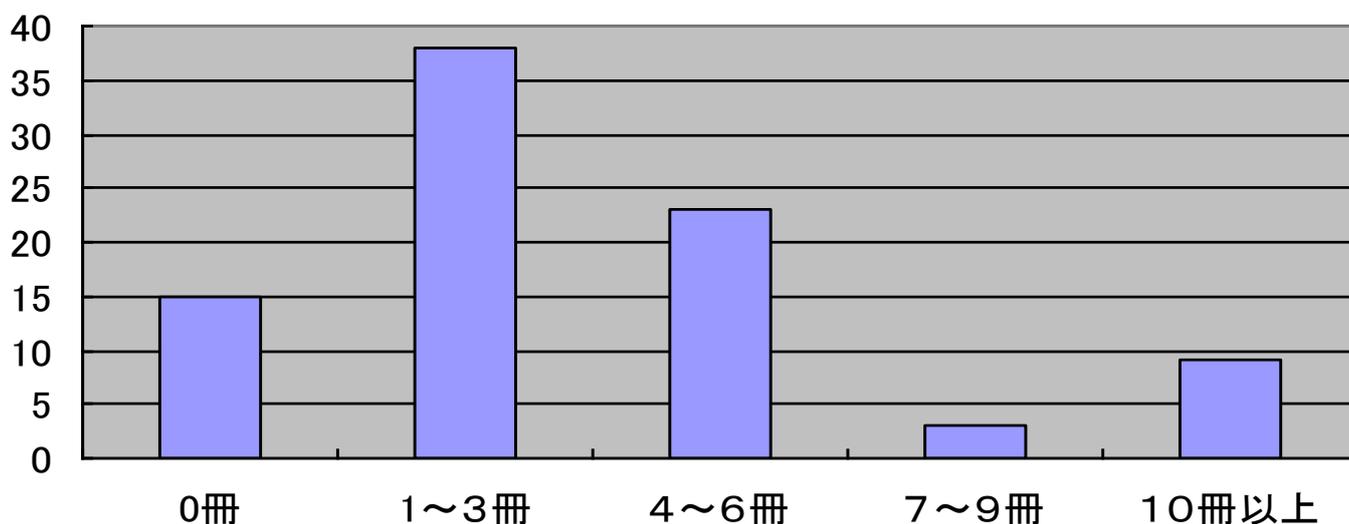
### NO10 新聞は読みますか



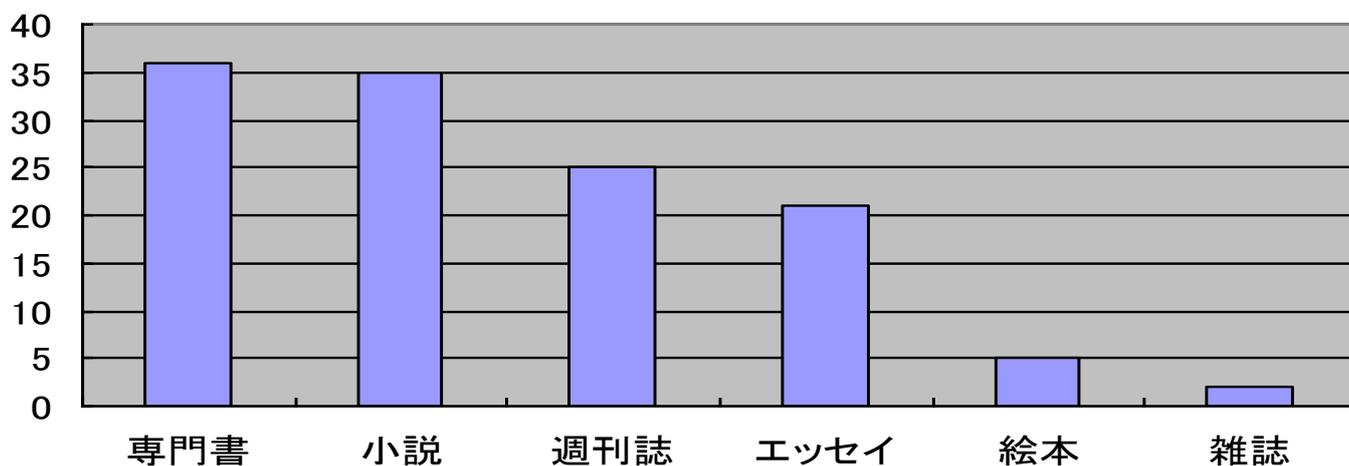
◆ 新聞の購読状況を年代別に表す



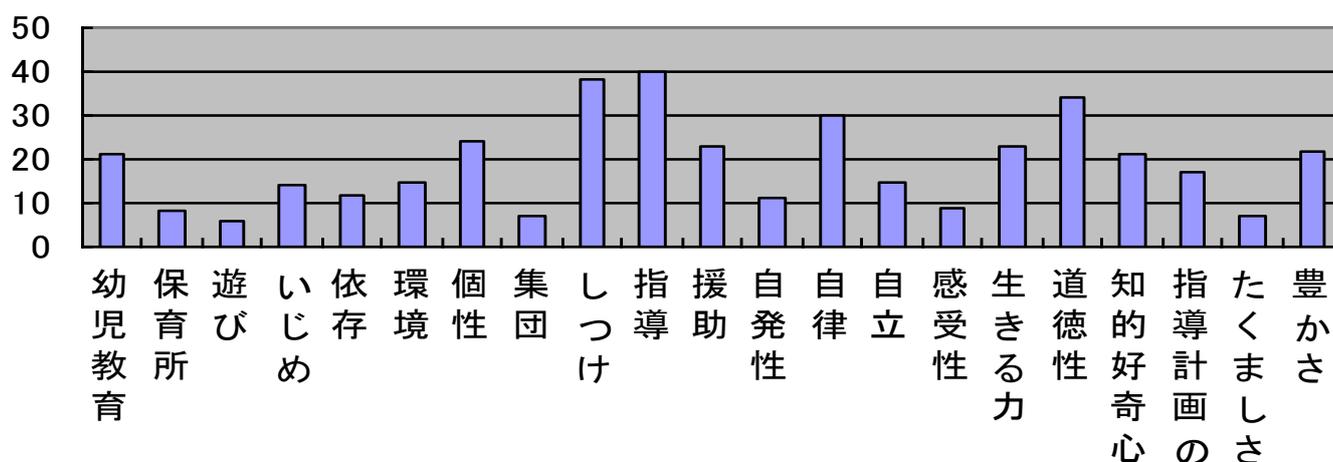
NO11 過去3ヶ月で読んだ本は何冊？



NO12 本のジャンルは何ですか？



# NO14 共通理解しにくい保育用語



No.13 下記の口の中の言葉をあなたの言葉で表現してください。

子ども

(大人の庇護を必要とする成長過程にあると捉えた視点)

- ・子どもとは親や大人の庇護がなければ生きていけない人のこと
- ・純粹無垢な存在で大人の環境によって染まる色が決まるもの
- ・成長するのに援助が必要な人のこと、成長過程の人
- ・想像力豊かで素直だけど、大人の援助が必要でその援助の違いによって育ちが変わる
- ・乳幼児、幼児、児童、援助や配慮が必要
- ・経験体験の少ない色々な色に染まっていない人
- ・大人として人として生きていくための成長発達段階

(独立した人間として捉えた視点)

- ・沢山の可能性を持っている大切な存在、親に愛されるべき存在
- ・想像力・発想力の宝庫。大人になるにつれて周りの視線や反応、世間体などを気にしてしまいがちだが、子どもは思ったこと感じたものを素直に表現できるので、その想像力や発想力を大切に受け止め伸ばしていきたい。
- ・誰でも可能性を秘めている。どんな遊びや保育でも自ら楽しみ、興味関心を持っていろいろと遊びを展開する力を持っている。
- ・好奇心が強く何でも挑戦し吸収する。
- ・一人一人個性があり、さまざまである。
- ・国の宝、誰の所有物でもない一人の人格を持つ人間
- ・大人には失われた大きな許容力と厳格さを持ち合わせた神様に最も近い存在。

(保育者にとって愛おしい者として捉えた視点)

- ・何事にもまっすぐに取り組む姿勢に先生としての自分を振り返り、考え直す機会を与えてもらったりと元気や力を与えてくれる存在。
- ・愛しい大切な存在
- ・笑顔がかわいく元気がある。
- ・子どもは大人の癒しでもあり元気の源 私にとっての癒し
- ・元気いっぱい、宝物、かわいい、純粹、小さい、

- ・生き甲斐
- ・未来を楽しみにしてくれる存在の人であり、毎日ギュッと抱きしめられる人
- ・私たちに笑顔をくれる大切な存在、かわいらしくて私たちが全力で守っていかなければならない人
- ・無邪気で夢や希望に満ちあふれた存在

## 遊び

### (一般概念で捉えた視点)

- ・心から楽しいと思える活動や行動
- ・楽しむ、娯楽、休養、リラックス、子どもの仕事
- ・人とのコミュニケーションをとるための方法のひとつ
- ・楽しい、冒険、おもしろい、挑戦、嬉しい、ワクワクドキドキ、探求
- ・遊びは心から楽しむことができるものだと思う。一日の生活の中で人間が生きていく中で欠かすことのできないものである。
- ・楽しむこと、本人が楽しめて満足できればそれが遊び

### (具体的表現で捉えた視点)

- ・時がたつのも忘れて思うがままに楽しむ。達成感や充実感を感じるもの
- ・ルールを守ることを知り友達と楽しむもの
- ・子どもが自発的に行う、保育者の介入によって行う活動、また楽しさを伴うもの。
- ・体を思いきり動かす、友達と関わり仲を深める場となる時間、自分の興味にあるものに集中して取り組める時間、創造性を豊かにする。
- ・友達関係を築いたり自然の移り変わりに気付いたり社会性を身につけるもの、またストレス解消となる楽しみなもの
- ・友達とのかかわりを学ぶもの、ルールを学ぶもの、思考発想を豊かにするもの、心の安定になるもの
- ・探求活動
- ・「不思議だなあ」「おもしろいなあ」と感じ想像したり作ったりするもの
- ・子どもの願い要求を踏まえた活動、無我夢中になれるもの。
- ・イメージを膨らませそれを友達に伝え共通のものを進めていく、今までできなかったことができるようになり自信や意欲を持ち行動したり試そうとしたりする。

### (学びとして捉えた視点)

- ・遊びを通して様々な学びをしている子どもにとって不可欠なもの。
- ・幼児にとって学びの場である。遊びの中からルールを知り、ルールを守る大切さも知る。ルールを守りながら友達と関わる力が育つ、その中で自然と身体を使い頭も使っていくのが遊び。
- ・楽しむ、創造性を豊かにする。精神面・運動面をも育てる大切な役割。
- ・学びのひとつの場。遊びの中からいろいろなことを知り(ルールや人との関わり、物の使い方名称、数の概念)覚えることを楽しみながら身につけることができる。
- ・子どもの生活の大半を占める、遊びが全てでありそこから学びへとつながる。
- ・幼児がたくさんのことを学んで身につけていく活動。たくさん遊ぶことで発見工夫をし、人とのコミュニケーション力がつき自分で考えて解決する能力がつくと思う。
- ・遊びは子どもの仕事です。遊びを通して学びます。
- ・遊びの中に学びがあり、発達段階にあわせた一種の勉強。
- ・言葉や身体の発達に欠かせないもの、精神の安定がはかれるもの

- ・遊びを通して生きる力を育ててあげたい。遊びの中の学びこそ大切である。

## 発達

### (〇〇ができるなど到達として捉えた視点)

- ・ひとつひとつの段階をクリアして大きくなること。
- ・まだ十分に成熟していない内容が整い、ある一定の段階に達すること。
- ・発達はできなかったことが少しずつできるようになりわからなかったことが解るようになること。更に向上すること。
- ・ある能力において以前より優れたり、成長した場面がみられること。
- ・機能・能力が高まること。
- ・過去と比べて成長したこと、その年齢月例に応じて持っている能力のこと。
- ・心の発達が豊かになり、たくましさや表現する力が豊かになること、身体的精神的に大きくなること

### (その時期の充実と捉えた視点)

- ・子ども一人一人の個人差があるので年齢ごとの平均的な発達像にとらわれないでその子どもは今までどんな環境で過ごしてきたかどんなことに興味関心があるかを理解し指導していくこと。
- ・周りの環境や人との関わりの中で変化していくこと。
- ・たくさんのかを理解し吸収していくこと。
- ・生まれてから死ぬまでの成長段階？
- ・育ちの中からできるようになったことの喜び、その喜びを得て更に頑張ろうとする心
- ・連続性を持った向上。
- ・その年齢にあった活動の結果
- ・個々に応じた成長であり、集団の目安にはなるが全てではない。個人の中に見出すもの。
- ・発達する喜びが得られなければ人は絶望するだろう。

## 自由保育

- ・子どもがひとりひとり自分の意志で選んだ遊びを自由にのびのびと行うこと。
- ・わかりません。
- ・全クラス一緒ではなく、各クラスでテーマやカリキュラムを決めて行う活動。
- ・自分がしたい遊びを気の合う友だちとゆっくりした時間で行うこと。
- ・自由保育の中に一斉、また一斉の中にも自由が存在するので別のものとは考えていない。
- ・子どもの自主性を大切に、好きなものをみつけじっくり取り組めるような環境を用意する  
保育や保育者によって方法などが別のため、一斉保育より教師の力量が問われるように思う。

## 一斉保育

- ・保育者が決められた活動を決められた時間に行う、その時間はしたい遊びもできなくて我慢している子どももいるかもしれない。
- ・クラス全員で共通のねらいのもと同じ活動を行うこと。
- ・教師主導、カリキュラムに従って規則正しくねらいを達成していくもの。
- ・個から集団へと広げるための活動(人と関わる、社会性を培う)
- ・みんなと一緒にしたり、一対一ではなくて集団で活動したり話を聞いたりする活動だと思う。  
両方の保育を経験することで小学校につなげていけると思う。
- ・教師が中心となり全員が同じ活動をする(学校のようにするスタイル)良いところは経験のない子どもにも平均的に経験させられること、その到達度もよくみえるところ、しかし自主性に欠ける  
ところがあり教師の思いを押しつける形になりかねない保育形態。

## ①-2 アンケートの調査結果の考察

- 先ず驚き、感激したことは、日々忙しい中で回収率 94%の回答が得られたことである。特に、記述の箇所が多いにもかかわらず、多くの先生方がそれぞれの自分の言葉で記入して頂いていた。

保育者が日頃より「言葉」に対して興味関心を高く持っているということが伺われた。

記述方式で書かれたNo.13の回答は、実に多種多様な表現で記載されており興味深いものだった。

私なりにカテゴライズしてみたが、表現は違っても保育用語の共通理解は概ね達せられている。但し、「子ども」・「発達」の用語の中には、視点が全く違う意見に分かれている部分もあり、保育の推進に於いて重要なキーワードだと考えるので、更なる共通理解への手立てが必要だと思う。

(アンケートNo.13の回答全収録は、参考資料として巻末に添付)

教育要領改訂については、県内・市内の研修会が充実しているおかげで、殆どの保育者に周知がなされていた。しかしながらその内容の理解については「自信が無い」と答えた保育者の数が実に4分の3に達していた。幼稚園教育要領の表現の性質上致し方ない結果かとも思うが、保育の根幹を成す重要な部分であるので、研修の在り方等を更に工夫する必要がある。

- No.5、No.6の表からもわかるように、今回のアンケートは年齢 20 歳から 30 歳、経験年数 1 年から 10 年という若い先生方の回答が 4 分の 3 となっている。この世代は、情報の道具としてインターネット・携帯電話が日常的に存在した環境で育っている。たくさんの恩恵も享受しているであろうが、ひとつを得ればひとつを失うという理通り、世に言う活字離れの世代でもあるのだろう。

No.10の表から新聞に親しみを持つことが少なく、No.11の表から本に親しむという時間が少ないということがみえてくる。

新聞や読書に拠らなくても、別の媒体で情報収集していることは予想されるが、じっくりと活字に親しむ体験の不足は、豊かで多種多様な言葉の獲得の妨げになっていることは否めないのではないだろうか。

国語の読解力という視点で興味深い体験をした。今年3月に福岡県私立幼稚園振興協会主催の新採研修会の折、このテーマについて研修を行い、実際に読解力のワークをしたことがあった。選んだ素材は小林秀雄の「人形」という小さな随筆である。

小林秀雄の文章は難解であるが、選抜すれば小学生でも読み解くことが可能であるという斎藤孝氏の文章に励まされて、この文の要旨を表現していると思われる部分に棒線を引いて頂く作業を行った。しかし、難しいと感じた教師が多らしく、読解力といった基礎的な国語力の獲得が必要であると痛感した。

(使用文章は巻末に添付)

- 本園の保育者に、このアンケート結果を見せ「どうして活字離れが起きているのか」と雑談したところ「本を読む大切さはわかっているつもりだが日々の保育の忙しさにぐったり疲れて本を読む気力と時間が無い」という答えが圧倒的に多かった。

その他に「ニュースはテレビで観る」「新聞には読めない漢字があって面倒だ」「読みたい本が無い」「何を読んだら良いかわからない」「本屋に行くとたくさんの本が並んでいるが一体誰が読んでいるのだろうと不思議に思うことがある」「本を買うお金がない」など実に正直な意見を聞くことができた。その中で特に、保育者の多忙ということが、読書への親しみの大きな壁になっていることを強く感じた。

- No.14では共通理解しにくい言葉を挙げてもらったが、「自立」に対して「自律」のポイントが高いという結果から、回答に際してアンケート対象者が丁寧に回答して頂いたと推察できる。この中で特に「しつけ」と「指導」のポイントが高かったことは、現代の保育者の意識を探る

うえで着目してみたい。

「指導」という言葉を保育の場で使用する時、ちょっとしたためらいにも似た感情が保育者の中に起こることをしばしば体験することがあるからである。何故なら幼稚園は「指導」ではなく「援助」することが保育者の仕事だと認識されている傾向があるからである。

また「しつけ」のポイントが高かったことに正直驚いた。「しつけ」とは「躾」すなわち身を美しく保つ事で、形に表現されるものであり文化として我が国に伝承されてきたものが多く含まれている。例えば、食育活動のひとつとして幼稚園で食事を提供する時のことを例にとろう。

その折「ご飯は左、汁物は右」といった私達の年代では当たり前だったことが、全く受け継がれていない場面に考えさせられるものがある。食事はおいしく楽しく食べれば良いという考えを否定するものではないが、どこか寂しい気持ちがあるのも事実である。「しつけ」という言葉自体が死語になってしまっているのかもしれない。そうだとすればこの言葉が共通理解しにくいという回答は、また違った意味で興味深い。

## ② 事例から

### ②-1 事例1 「自分で採ったの？」

ゆきこは3年保育年中の4歳児である。口数が少なくおとなしい。3歳児の頃は殆ど口を開かず、場面緘黙の傾向が心配されたが、持ち上がりの担任(経験2年目)に親しみを覚え少しずつ言葉を発するようになってきた。

6月中旬頃、梅雨の晴れ間をぬって子どもたちはもうすぐ収穫する予定のジャガイモ畑の観察に保育者と一緒に出かけた。私も誘われて一緒に付いて行った。

ジャガイモ畑の周囲には石が積まれていて子どもたちはその石をひっくり返すとそこにダンゴムシがたくさんいることを知っている。案の定その日もダンゴムシ探しが始まった。

しばらくすると右手を握りしめたゆきこが担任の傍に立ち、その手を広げて手の中のダンゴムシを見せていた。それを受けて担任が「自分で採ったの？」と声をかけた。

ゆきこはうんと頭を横に振り、右手を握りしめてその場を離れた。

以前ゆきこが虫が苦手だと聞いていたので、保育終了後何故あの時、ゆきこが苦手な虫を手にしてきたのに、まずそのことを褒めてあげなかったのか聞いてみた。

すると担任は受け入れてあげる言葉をかけてあげなかったことを反省すると同時に何故その言葉が口に出てしまったかを話してくれた。

「ゆきちゃんは虫に触ることにだいぶ慣れてきて友だちが手にのせてあげると喜んでその虫に触るようにはなってきたのです。でもまだ自分から虫を捕まえるということができなくて、私はゆきちゃんが自分で虫をつかまえられるようになるといいなあと思っていたので、ついその思いが口に出てしまいました」

### 《考察》

保育者にとって受容と共感は大きな援助のひとつである。しかし私にはこの保育者の思いもよく理解できた。保育者は個々の子どもたちにそれぞれのねがいやねらいを持って日々保育にあたっている。この事例も「虫はさわれるようになった、次は自分で虫を捕まえる勇気をもってほしいな」と子どもを細やかに見続けた保育者の願いが優先してしまって口に出てしまったのである。

そうはいっても、やはりこの場面では「あらすごい」と受容してあげることが必要だった。

保育者の願いやめあてが優先し、目の前にいる子どもが、今感じている感動を見えなくしてしまったのである。

もしこの時、先ず子どもの感動に寄り添えたならば、受容されたゆきこは、きっとニコツと笑って担任の傍を離れたことだろう。保育者に認められた喜びは、自信につながり、やがて自分で虫を捕まえることに挑戦するようになったであろう。

## ②-2 事例2 「もう少し待ってみようと思います」

6月中旬 昨日から降り続いた雨が止まず、空は厚い雲でおおわれている。保育室も暗くていつもの朝とはずいぶん雰囲気が違う。

しょう(4歳児) 「どうして先生きょうは暗いと？」

保育者(経験8年) 「どうしてだろうね」

しょう 「ウン・・・おひさまがおらんからよ」

保育者 「おひさまどこへいったんやろうね」

しょう 「ウン・・・わかった。

暗いからおひさまが出てこんのよ。

明るくなったらおひさま出てくるよ。先生待ってて」

保育者 「そうなの？」

保育記録にこのやりとりを記載した保育者は、更に下記のように書いてあった。

「私は彼が、暗いからお日様が出てこないのではなく、お日様が出てこないから暗いのだと気付くまでもう少し待ってみようと思いました。また、彼の言葉を受けて思わず「そーなの」と否定的なニュアンスで応えてしまっはたしてよかったのかなと反省しました。彼の話が正しくなくても「そーなのね」と肯定的に受け止めてあげればよかったなあと思いました。たった一文字の違いですが、言葉って本当にややこしいと思います」

### 《考察》

子どもの気付きを大切にしたいと日頃より丁寧な保育を展開しているこの保育者らしい記録である。知識をそのまま教えるよりも「どうしてだろう」「ふしぎだな」といった感動を基にして、知的好奇心の芽生えを損なわないようにと努力している保育の姿勢を読みとることができる。

また、たった一文字の違いで、伝えるニュアンスが全く違うことに気付き、保育者の発する言葉の重さに着目している点には脱帽した。

日々の保育記録には「楽しかった」「おもしろそうだった」などの言葉が多く登場する。その都度「何がおもしろそうだったのですか」「楽しそうと感じた場面はどこですか」「どういった環境設定が子どもに楽しそうと感じさせたのでしょうか」と疑問符でコメントすると再度自分の保育をふりかえてみるということになる。園内で保育者の指導にあたる主任教諭や園長が、日々の保育記録を丁寧に読んで、厳しくも温かいコミュニケーションを構築していく積み重ねが保育者の思考を促し、豊かな言葉の獲得につながっていくと考える。

### ②-3 事例3 「小さなじゃがいも」

今年の2月に年少組の時植えたジャガイモの収穫の時期になった。6月中旬のカレー会を控え、年中児は自分たちで収穫することになった。

その日の収穫に関しての記録の「じゃがいもが小さかった」という保育者(経験18年)の表記に、私は咽に小骨が引っかかったような小さなひっかかりを感じていた。

それから一カ月過ぎの7月末に、市内で施設見学ができる研究大会があり、大きな菜園を持つ幼稚園を見学してきたこの保育者の報告のひとつに「大きなじゃがいもが収穫されていました」という記述があった。

#### 《考察》

**栽培活動は自然の不思議さを子どもたちに伝え、そこから生命の尊さに気付くきっかけとなる極めて重要な活動のひとつである。また、昨今注目の食育活動の一環として指導計画立案上欠かすことのできない活動である。**

プランターの土をひっくり返す土作りから始まり、種や苗の植え付け、日頃の水やり等を通しての観察と生長する不思議さに驚く日々、やがて収穫の時になった子どもたちの喜びは、いかばかりだろう。大切に収穫し、それを食する嬉しさ等挙げればきりが無いほどに豊かな内容を持つ活動のひとつである。その目的は「立派な作物を収穫する」という結果のみを重視した活動では決してあってはならないが、つつい目に見える結果に捉われてしまいがちになる。

活動の過程にこそ保育者の願いとねらいを込めていくことを忘れてはいけない。

日々展開している諸々の活動は、教育の目的を達成するための方法であると考え、活動すること自体が、あるいは活動そのものが目的になっていることはないだろうか。その活動を通して何を育てたいのか、育てるものは何なのかを自分の言葉で明確に持ち続けることができる保育者である必要を痛感した。

### ②-4 事例4 ほほ笑む言葉

7月終業式を間近に控えた5歳児が園外活動から帰ってきた。明らかに怒った顔のこうたとあきらが担任に連れられて職員室にやってきた。「バスの中でこうたくんがあきらくんをげんこつで叩いたんです。どんなに理由を聞いても二人とも何も話しません。しばらく職員室でお願いします」と担任は他の子どもたちの昼食の準備もあるので保育室に引き揚げた。

こうたは日頃より思い通りにならないとつい手が出てしまう。しかしながら優しい一面も持ち合わせ、怪我をした子どもを職員室に連れてきたり、水筒の水が少なくなった小さい子どものために、職員室まで水を貰いにくるなどのお世話でよく職員室に来ていた。

たまたま、すぐ傍にいた事務職員が二人によりそう形になった。

以下、3人の会話

事務職員 「おかしいね、こうちゃんはその子じゃないのに・・・」

==しばらく3人 無言==

こうた 「あきらが先にたたいた」

事務職員 「おかしいね、あきらくんもそんな子じゃないのに・・・」

あきら 「嫌なことがあった」

こうた 「仕方ないやろ、じゃんけんで負けたんやから」

こうた・あきら

「あのねあのね、ぼくたち二人ともきりりちゃんが好きなんですよ。

だから二人ともきりりちゃんと結婚したいんですけど、二人は結婚できんからじゃんけんしたんですよ。

そしたらあきらくんが負けてぼくをたたいたんですよ」

その言葉を聞いて無言で事務職員がほほ笑んだ。傍らで聞いていた私や他の職員も思わず笑ってしまった。それと同時に今まで堅い表情でにらみあっていたあきらとこうたも声を出して笑い始めた。「ご飯食べようか」というこうたの言葉に「うん」とあきは応えて二人で保育室に帰って行った。

## 《考察》

上記の事例は記すと短いですが、10分位の出来事である。その間にこの事務職員が発した言葉は上記の二言だけである。後は唯、静かにほほ笑んで二人の顔を交互に見ていただけだった。

しかし無言でほほ笑み続ける事務職員は、表出しない言葉でどうしたら解決できるか考えていたであろう。表出した言葉でも解るように目の前にいる子どもを信じて「何があったんだろう」「叩かれて痛かったね」「よっぼど腹がたつたんだね」そんな思いで待ち続けた結果、思いがけない原因のおかしさに思わず笑いがこみ上げてきた。その笑顔を見て、二人の子どももこだわりが溶けていった。子どもたちは、原因は何であれ、叩くという行動を悪いことだと、もう十分に理解し反省していると感じた見事な対応であった。若し原因をもっと強い言葉で問い詰めたならば子どもたちはずっと頑なな状態のままだったかもしれない。

子どもたちをゆっくりと受け止め「そうそう」という相槌のような表出しない言葉もまた、保育の場では重要である。そのためには子どもに寄り添える、ゆっくりとした時間・空間が必要であるが、日々の保育に追われる担任だけではなかなかその対応は難しい。そこで保育の現場にも小学校以上の学校にある保健室のような機能を持った組織作りが必要である。

## ②-5 保育者の豊かな言葉に向けての本園の取り組み

保育者の豊かな言葉の獲得が質の高い保育を推進するうえで必要なものだという共通理解の下本園で実施している取り組みを述べる。

### 1) 子どもが持参する新聞の掲示

美しい雪山の新聞の写真を掲示したことから、子どもたちの間でも各家庭から前日に保護者と一緒に新聞を見て感動した記事を切り抜いて持ってくるようになった。新聞を読まない若者が増えている現代、小さい頃から新聞に親しむということをするれば新聞離れの歯止めにも少しでもなるのではないかと考え、2カ月程続けた。

しかし、在園児の家庭で新聞を購読していない割合が多いのではないかと懸念が保育者より出て、現在は幼稚園で購読している新聞の中から時々選択して掲示している。

### 2) 言葉の掲示板

本園の踊り場の壁を利用して、毎月保育者が交替で「子どもに伝えたい絵本や写真や言葉」をひらがなに書き直したものを文字環境として掲示している。

文字を読むことができるようになった年長組などは、ひとつひとつの文字を指で追いながら友だちと親しんでいる。

7月は私の担当だったので、サン・テグジュペリの「星の王子さま」からいくつか抜粋して掲示し、

その横にその本も置いた。

余談ではあるが本園の職員にこの童話を通読したことがあるかと尋ねたら、見事に NO だった。

「星の王子さま」は知っているが全部を読んだことはないという答えに、この名作といえる童話もいまや若者にとってトルストイや夏目漱石などと同じく古典になってしまっているのだと考えさせられた。

### 3) 読んで感動した本の紹介と廻し読み

読んで良かったと思える本をみんなに紹介し、廻し読みしましょうということである。本を紹介するという事は、自分の内面を見られるようで気恥しい部分もあるが、研修会などで紹介された保育テキストが紹介されることがある。ただ忙しい保育者である、廻し読みの本がいつまでも机の上に置いたままということはよくあるのは致し方ない。

### 4) 朝の一分間スピーチの実施

朝 8 時より朝礼を行っているが、その中で日直職員が 1 分間スピーチをしようと心がけている。

実際は、早朝登園の子どもたちや連絡電話で中断したり出来なかつたりすることが多い。しかし話すことは言葉の訓練に役に立つし、また共に働く同僚が何をどう感じているかを知る良いきっかけになるので細々と続けている。

先日、一人の職員が「通勤途中のラジオでウサギは他の動物に噛まれたらそこから皮がむけるとい話を聞いて昔の人はそのことを知っていて(因幡のしろうさぎ)の話が出来たのだと思った」とい話をした。経験 2 年目の保育者はその話自体を知らなかつたし、因幡のしろうさぎの歌を全部知っている者もいなかつた。

そこで保育後、インターネットでそのあらすじや歌詞を調べ、パソコンの前でみんなで懐かしい歌を歌い合うという愉快な出来事にもつながったことがあつた。

### 5) 保育記録を媒介にしたコミュニケーション

事例 2 で述べたように一週間に一度保育記録の提出をする。それを丁寧に読み、必ず返事を書くことで保育者とのコミュニケーションを図っている。それぞれの保育者が抱えている問題は個々のもので、ひとつとして同じ回答は出来ない。

指導する・解決策を提示するというよりも、絶えず質問を投げかけることで保育者の思考を促し、自ら問題を解決していく保育者に育って欲しいと願っている。

### 6) 職員会議・園内研修で使用する保育用語の共通理解

会議や研修の場で使う保育用語について、いつも共通理解がなされているか確認をし続ける努力をしている。特に子ども理解の場面では「楽しそうだった」などの言葉を避け、具体的な場面を捉えて研修をする努力をしている。そのためには記録が欠かせないところであるが、日々の忙しさに追われる保育者が簡単に的確に記録できる方法をなかなか編み出せない現状である。

## 5. おわりに～全体考察と今後の課題

目の前に、他の誰でもない“自分を生きている”この子がいる。他のどの時代でもない“今”を生きているこの子がいる。

ひとつとして同じ事例は無い。この時を逃せば、この場所を逃せば、この私を逃せば、二度と同じ保育は無い。まさしく瞬間、瞬間の一本勝負のようなものと身が引き締まる。

瞬間、瞬間を生きる子どもとの日常の保育の中は、予想し得ない場面の連続である。そのような状況に遭遇した時、子どもと向かい合う保育者が、その対応を瞬時に模索し、思考し、実践する力を

【実践知】とするならば、私達保育者はこの自分の《頭と心》の中に、「思考の道具」「コミュニケーションの道具」として「豊かな言語」を湛えていることが必要なのではないかという視点で出発した本発表である。

当の本人が未熟な言語能力を感じることしきりであった。しかし、ご指導頂いた白梅学園短期大学師岡章教授の「せっかくだから後輩のためにまとめてみてください」また「このテーマは始まりがそのまま終わりであり、終わりがそのまま始まりですね」という言葉に励まされてどうにかまとめに辿り着いた。終わりにあたり、また新たなスタート地点に立った気がする。

- アンケート調査結果より、保育者の間にも新聞や本に親しむ機会が少なくなり、活字離れが進んでいる実態が明らかになった。つまり、読書は大切なことだという自覚はあっても、活字離れの傾向のため、語彙の獲得・読解力・表現力といった言語の獲得のための訓練がなかなか出来にくくなっている状況であるといえよう。

それは、保育者の日々の忙しさが大きな原因と考えられる。余裕のある保育者のところもちが豊かな保育を紡ぎだすことは今更いうまでもない。

今夏の全国幼稚園教育研究協議会のアンケートで、幼稚園教諭の仕事従事時間が11時間から12時間にも及ぶことが報告されている。

ゆとりあるところもちと物理的な時間を保育者に取り戻すことで、活字に親しむ余裕も生まれてくるのではないかと期待する。

今後は、何が現代の保育者を多忙にしているのか、また「忙しい」と感じさせる要因は何なのかを保育者の生の声を聞くなどの新たなアプローチで検証し、その解決を模索し、改善の手当てを講じることが急務であると考えます。

- 保育用語も様々な捉え方があった。ひとつとして同じ表現は無い。かように保育用語の共通理解はむずかしい。

全てが同じという必要は全くないが、せめて保育を共にする保育者間では、留意しておく必要がある。保育の深まりのために、保育用語の共通理解の手立てと方法のために、例えば「本園の保育用語解釈辞典」のようなものの作成など、具体的な切り口で継続研修していきたいと考えている。それぞれの幼稚園で使われる言葉を、その園で働く保育者が共通理解することで、その園の独自性や特徴が、あぶり出しのように鮮明に見えてくるのではないだろうか。

- アンケートの最後の項目は「言葉について考えていることを書いてください」だった。

圧倒的に多かったのは「言葉はとても大切なものだと思っている」「さらに研鑽を深めたい」という内容であった。

多くの保育者が言葉の大切さに気付き、その訓練をしたいと考えている証拠である。しかしながら活字離れが進んでいる。

そこで、活字離れの原因説明方法として、幼稚園と小学校・中学校が連携して「子どもはいつ読書の楽しみを失うのだろうか」「失うとしたらそれは何に起因するのだろうか」といった調査・研究の必要性があると思う。

幼稚園の実践の中では、絵本の大切さはもう十分に周知しているといえるし、多くの幼稚園で絵本の活動は推進されていると思う。絵本を嫌がる子どもは少ない、いや殆どいないとあっていいのではないか。幼稚園時代あれほど絵本に親しんだ子どもたちが、いつから何の原因で本に親しむことから離れていくのだろうか。それを、幼少の連携の中で長期的・継続的に研究していくことは、今後意義

のあることだと考える。

○ 幼稚園教育要領「言葉」から引用する。

——経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や表現する力を養う——

上記のことは、そのまま保育者自身のめあてにもなるだろう。「難しいことをやさしく、やさしいことを深く、深いことを愉かに」とは、作家井上やすし氏の座右の銘であったそうだが、保育者にも求められる言葉の使い様である。

人間の先輩として、高く清々しい理想を子どもたちへ伝えていくことは、教育の醍醐味である。

「こういう人間になってほしい」「こんな人生を歩んでほしい」といった個々の保育者の人生観や倫理観が教育には込められている。実践する保育者の生きざまが問われる仕事である。

教育の目的は、人間の普遍的な幸せの追求である。併せて、過去の教育が「その時代が求める人間像」を追求してきたこともまた事実である。「人間の基礎」の教育に携わる私たち保育者には「自分自身の精神の修養」とともに「時代を読む力」も求められる。しかしながら、現代はどこかそこどころが抜け落ちているような気がしてならない。それを今一度取り戻すために、保育学だけにとどまらない幅広い研修の種類を工夫していく必要があるのではないかと考える。

○ 養成校との連携等について述べる。

養成校での学びで理解していたはずのことが、体験した保育の場で、初めてストンと理解できることは保育者なら誰もが経験することだろう。古い昔のテキストを引っ張り出したりして、学生の時もっと真面目に学ばよかったと反省する。もう一度学びをしたい・相談したいと思った時、駆け込めるような養成校との連携はできないものだろうか。

最後に、保育者の養成校は圧倒的に短期大学等の2年という短い期間である。私も遠い昔のことになったが、朝から夕方までの講義や実習に追われ、高等学校よりも忙しいと感じていた。

20歳前後の多感の時期である。もっとゆっくりと本を読み、感動する芸術にふれ、人生について友と語らいたかったと思う。また、保育について自分なりの課題・目的を見つけ研究し、恩師に指導を請うゆとりがあったらよかったと思う。

養成期間の延長に関しては、保育者の待遇・処遇面で解決すべき多くのことがあると思われる。しかし、保育者が保育の専門者として質の高い保育を推進するために欠かせない論点のひとつと考える。

参考文献

- ・河合 雅雄 「子どもと自然」 岩波新書 1991年
- ・鎌田 實 「言葉で治療する」 朝日新聞出版 2009年
- ・倉橋 惣三 「育てのこころ」 フレーベル館 2008年
- ・岸井 勇雄 「子育て小辞典-幼児教育・保育のキーワード」 エイデル研究所 2003年
- ・斎藤 孝 「理想の国語教科書」 文藝春秋 2002年
- ・田中 圭治郎編 「基礎教育〈教育学入門〉」 佛教大学 2003年
- ・土屋 秀宇 「愛語よく廻天の力あり」 登龍館 1995年

- ・津守 真 「保育の一日とその周辺」 フレーベル館 1989年
- ・津守 真 「保育の地平線-私的体験から普遍に向けて」 ミネルヴァ書房 1997年
- ・服部 幸子 「子どもが育つみちすじ」 牛路書房 1999年
- ・松原 達哉 「幼児のことばと数の指導」 1977年
- ・益地 勝志 「子どもが変わる教師の言葉かけ」 明治図書 1995年
- ・宮台 真司 「まぼろしの郊外」 朝日文庫 2004年
- ・柳田 邦男 「言葉の力生きる力」 新潮社 2002年
- ・柳田 邦雄 「石に言葉を教える-壊れる日本人への処方箋」 新潮社 2006年

#### 謝辞

本発表にあたり、アンケートにご協力頂いた北九州市内の私立幼稚園の先生方に感謝いたしますと同時に日々保育に忙しい中、事例の提供の労にあたった本園職員に感謝いたします。

また、ご多忙の中、本原稿を温かくご指導を頂きました白梅学園短期大学教授 師岡章先生、並びに当会発表の機会を与えて頂きました福岡県私立幼稚園振興協会教育研究委員長 黒田秀樹先生に心より感謝申し上げます。

#### 付記

本発表の一部は、平成21年11月29日に行われた九州保育研究会で発表している。